

入中1年人権だより

徳島市 八万中学校
1年生 第21号
2021年 1月29日
編集・文責 吉成正士

人を守る・命を守る・自然災害大国日本

1995年1月17日。その日を偲んで、震災について、災害や防災・減災について、学習をしてきました。みんながどんなことを知り、思い、感じているのか、知りたいなあと思います。

あの日への思い、東日本大震災への思い、私もそれなりにありますが、今回は熊本地震のときのことにについて、当時書き込んでいたブログを紹介する形で語っていかうと思います。



熊本地震が起きたのが5年前の2016年4月14日。その約2週間後のゴールデンウィークに、私は車を走らせて災害ボランティアに駆けつけました。ワゴン車に簡易畳を敷き、車中泊しつつ、朝が来れば自前の自転車でボランティアセンターまで行くのですが、本当にいろんな思いを抱かせてもらいました。

<1日目>

「放ってください。全部放ってください。」

何度同じ言葉を吐き出したか。老夫婦の自宅。足の踏み場もないほど散乱し瓦礫と化した食器、家財道具。本当に片づくのか——。どこからどう手をつけていいのかわからず、途方にくれる。

粉々に砕け散った食器を拾い集めながら、家族が重ねてきた時間を想う。老夫婦の家に4つのお椀。かつて家族が囲んだであろう歴史が食卓によみがえる。

「放ってください。全部放ってください。」

放りたいのではない。そうするしかないのだ。思い出を手ですくい集めながら、何度も何度も泣きそうになった。

「放ってください。全部放ってください。」

おじいさん、歳を訊くと84歳。我が父と同年。同じ境遇になれば、親父も同じ言葉を吐くのだろうか。胸が痛む。また涙がにじんできた。

<2日目>

熊本市内の小中高校のほとんどが、GW明けまで休み。一緒にボランティア活動をしている女子高生に訊いた。どうしてボランティアに？

「自分にはこんなことしかできないので…」

愚問だった。

ていねいに一つ一つ作業していく姿がいじらしかった。バレーボール部だが、春の大会もなくなり、あとはインターハイだけとのこと。しかしこの一ヶ月は何もできてない。他の部もそうだし、受験模試も体育祭も、消えた。恐らく小中学校も。

練習しなくては上手くはならない。が、強くはなれる。思うようにできない時間が、思いを、自分を、仲間との絆を強くする。決して失ったものばかりで

はない。無責任と言われても敢えて言う。

がんばれ！ ラストマッチ！

がんばれ！ インターハイ！

がんばれ！ バレーボール！

<3日目>

崩れ落ちたブロック塀。大人9人で撤去作業にあたる。使い物にならなくなったブロックの上に、破壊されたブロックをほどよく積み重ねていく。再び崩れぬように。

持ったとたん、あっ！

真っ二つに割れたブロックの塊が、足先に命中。

痛っ。

作業のあと、家主の女性が地震の時の状況を語る。

「ドンッ！という本震の縦揺れに体が浮いた」

何をバカな、口には出さない心の声。が、周囲の人々も口々に言う。

「湯船のお湯が一瞬でなくなった」

「屋根に頭が当たった」

本人が言うのだから嘘ではない、が…。

家主の母、97歳。「危険」と書かれた赤い紙が貼られた家に、今も暮らす。寝たきりで意識もないし、先も長くはないから、と家主の女性。

この家を、家族を、この国を支えて来たはずの97歳。その母を想う家主の思い。

甚大な被害だけではなく、些細でも大切な被害が見えないところにある。足の痛みが、どうした！

<4日目>

お気に入りのコミックは？

誰にも一つや二つはある。なかには本棚いっぱいの人。それ私だ！と思った人も。

ビニール袋に入れられた「ハツカレ」、「特攻の拓」、「沈黙の艦隊」、家族それぞれの時代を見る。

くまのプーさん、親子のホワイトタイガーのぬいぐるみ。大きな親のホワイトタイガーにまたがり、抱きつき、小さな子どものホワイトタイガーを抱きしめて眠ったのだろう。

「ごめんね、今までありがとうね」

涙声で話しかけ、ぬいぐるみの瞳をそっとティッシュで押さえ、ビニール袋に入れる家人。

壊れた屋根、青のビニールシートの隙間から青空がのぞく。地震だけならまだしも、雨の犠牲になった思い出たち。明日もまた雨。追い討ちが恨めしい。

夏日の過酷な作業の終わり頃、虚を突いたように、どこからともなく、縦笛の音色が響いてくる。

「うさぎ追いかの山 小鮒釣りしかの川——」

探し見れば避難所の小学生。疲れた気持ちにホロリと風が吹き抜けた。

<5日目>

熊本市内、日常を取り戻したかのように見える。ビルが建っている。マクドナルドもある。電車やバスも走っている。人の流れもある。一見だけするなら。

イオンの一部ははまだ閉店または部分営業。閉じられたままの店やビルも多い。24Hマクドナルドも時間営業。ボランティアにお邪魔した家は電気がつかず、ガスも使えない。漏電やガス漏れの危険性があるから。日中の屋内ボランティアも暗い中での作業。余震で油調理に不安を抱えたままの料理店も多い。

益城町、まるでゴジラが歩いたかのような、あり得ない惨状。笑えない。

益城町と道を隔てた熊本市小峰地区も同じ状況だが、知られていない。知らないことだらけの町を、大阪の、伊勢の、鳥取の、島根の、徳島の県外ナンバーをつけた災害ゴミ回収車が行き交う。

最後は人力。そこにある笑顔とつながりが、明日への希望となる。



<6日目>

強風が吹き荒れるとどうなるか。

町中に溢れかえったゴミが、風であおられ凶器へと変わる。災害ゴミ回収作業は遅々として進まぬが、それでも全国ナンバーの回収車が連日町を走り抜ける。頭が下がる。

今日の作業は、福岡2人、岡山1人、京都1人、私の男5人による崩れたブロック塀の撤去。鉄骨をねじ切るにもコツがいる。ハンマーとペンチを駆使。お年寄りには到底無理。全国から集結するボランティアにも頭が下がる。

強風のなか、そこかしこの家に被せられたビニールシートが不気味な音をたてる。今にも破れ、引きちぎれ、宙を舞いそうな勢い。もし飛んでいってしまえば…。風にたなびくのは鯉のぼりで良い。明日は子どもの日。子どもの声に元気をもらおう。

子は宝。元気いっぱい人生を泳いでおくれと心から願う。

そして、私と同じようにボランティア活動に関心を持っている方々の助けになればと、次のようなブログを記して、この活動を終えました。

ー災害ボランティアを考えている方へー

まず、災害ボランティアの出で立ち。

まちまちですが、一つだけ言えば、作業用ゴム手袋は隠れた必須アイテムです。

では、下から順に。

■靴→作業用鉄板入り長靴、普通の長靴、運動靴、いろいろですが、さすがに革靴はいけませんでし

た。

■ズボン→長ければジャージ、体操服、ジーパン、作業ズボン、いろいろで構いません。なかにはスラックスのような方も。

■上服→ズボン同様です。

■手袋→軍手では割れたガラスが危険なので、作業用ゴム手袋の方がいいです。

■マスク→本格的なものでなくても、花粉症マスクでも十分。

■頭→ヘルメットはない人がほとんどで、帽子はそれぞれの好みといたところす。

ボランティア前にオリエンテーションをしてもらった後、マッチングといって、それぞれに合った作業を紹介してくれて選べるので、それぞれの出で立ちで、女性でも学生でも可能です。継続して参加されている人もいますが、思った以上に新規で参加されている方が多いです。

支援は少人数の息切れするものではなく、できるだけ多くで息切れしないようにすることが理想的です。



当時の熊本市災害ボランティアセンターは、毎朝9時には長蛇の列でした。朝

の7時前から並んでいる人もいて、少し遅れて来た人には、その日用意されていたボランティアが当たらないこともありました。

そのなかで特に目についたのは、若者と女性。小学生が親子で。中高生がジャージで、体操服で、制服で。大学生がスタッフとしてボランティアを誘導し、案内し、受付を行っていました。

「最近の若者は」と言うけれど、この若者も最近の若者。東日本大震災や阪神淡路大震災が、この若者たちを育ててきたのだと思います。自然災害はないにこしたことはありませんが、それを意味あるものに変えていくこともできるわけです。西日本豪雨災害でもボランティアの様子が報道されていました。そのなかには、やはり若者が多く見受けられました。今後何らかの災害に見舞われたとき、みなさんはもう、助けられるだけの立場ではありません。自分を助けることはするでしょうが、おそらく同時に、他の人を助けるのではないかと思います。それは、この熊本での体験で、私は確信しました。

私に限らず、様々なボランティア活動に参加されたお家の方もおいでだと思います。そんな方も立派な「語り部」だと思います。良ければぜひ、子どもたちに語ってやってください。それが何よりの学びになります。

地震、津波、大雨、台風、噴火、豪雪、世界的に見ても稀に見る自然災害大国、日本。だからこそ、人を感じる気持ち、支え合う文化を、日常的に人権目線で育んでいきたいものです。

